ユニセフ
大阪通信
Unicef Osaka Newsletter
大阪ユニセフ協会ニュースレター　2023年2月15日発行
vol.23 No.89

CONTENTS

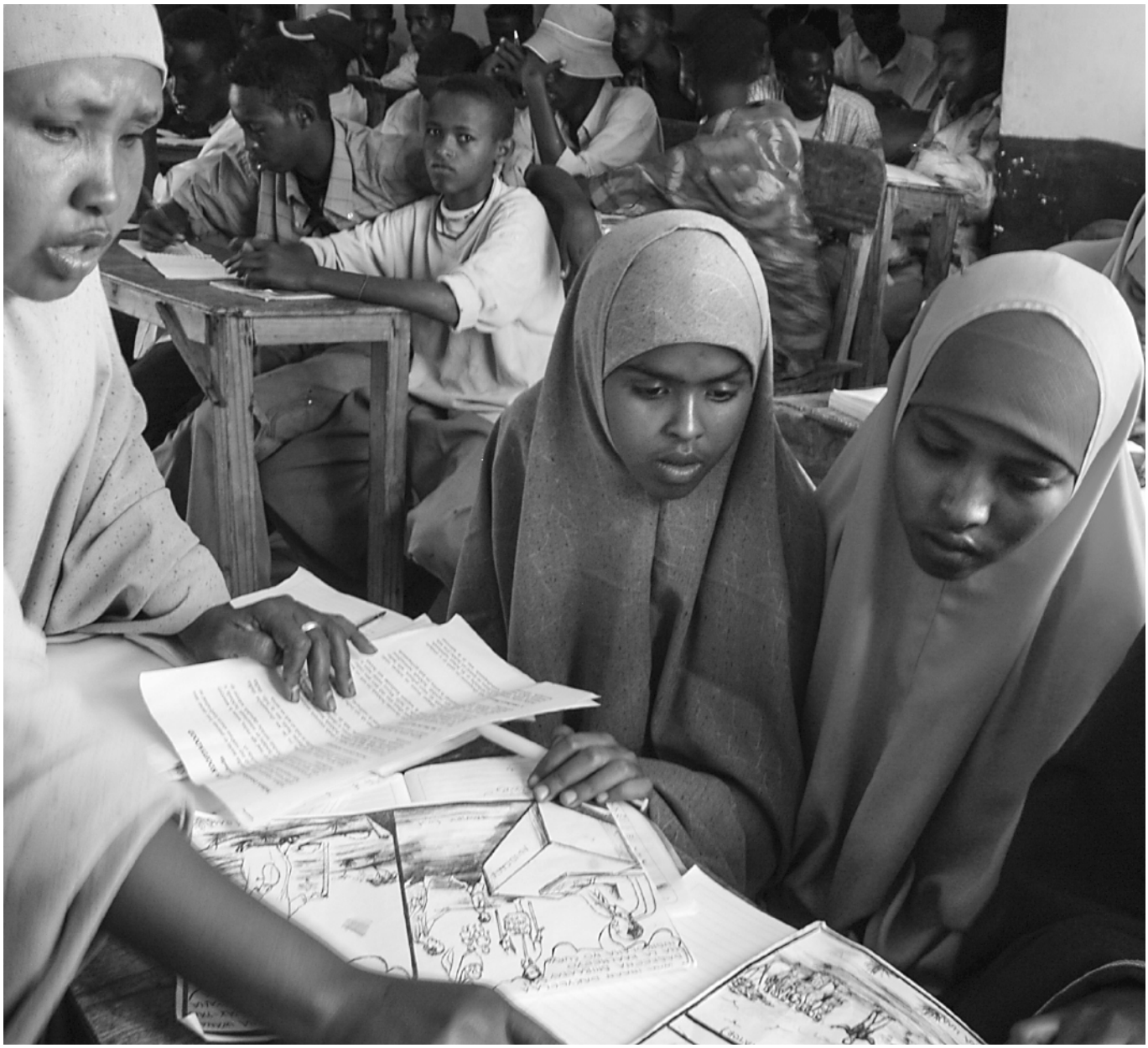
シリーズ　この人に聞く　第 28 回
2-3 國森康弘さん
遠い国の戦争　人ごとでなく
――命をつなぐ営みから理解する

ボランティアのおしごと
4 第４回　ハンド･イン･ハンド募金の実行隊
参加者の思いに応え　準備怠りなく

ユニセフを考える１冊①
5 ガフワラ『カカ･ムラド～ナカムラのおじさん』

ユニセフを考える１冊②
6 ジョン・ダワー
『敗北を抱きしめて』（二）

8 第44回 ハンド・イン・ハンド募金　報告



学ぶ喜びを覚えた、ソマリアの元少女兵たち。写真：國森康弘

遠い国の戦争　人ごとでなく

―― 命をつなぐ営みから理解する

國森（くにもり）　康弘（やすひろ）さん

1974 年生まれ。神戸新聞記者を経て独立。イラク、ソマリア、スーダン、ウガンダ、ブルキナファソ、カンボジアなどの紛争地や経済困窮地を回り、国内では戦争経験者や野宿労働者、東日本大震災被災者の取材を重ねてきた。命の有限性と継承性がテーマ。著書に『アンネのバラ』（講談社）、『子ども・平和・未来 21 世紀の紛争』（岩崎書店）など多数。

「私たちが目にする情報量は、必ずしも深刻度と比例しない」（ユニセフ・イエメン事務所職員小川亮子氏の言葉）。ウクライナ危機では連日激しさを増す戦闘が伝えられるが、そのたびに世界には報道されない、忘れ去られたような紛争地が幾つもあることを思い起こす。その一つ、ソマリアでは紛争で荒廃した国土に、干ばつが追い打ちをかける。戦争や内戦はなぜ終わらないのか。世界の紛争地を数多く取材してきた写真家・ジャーナリストの國森康弘さんに聞いた。（近藤敦子）

戦争で人は変わる

――ジャーナリストを志したきっかけは？

学生時代から世界のことを知りたいという思いがあり、同時に戦争がなぜ起こるのかとの疑問がつねに頭の片隅にありました。卒業後、新聞社に勤めているとき、9.11 同時多発攻撃がニューヨークで起りました。当時のブッシュ大統領がアフガニスタンやイラクへの報復を開始し、記者として現在進行形で始まっていく戦争を初めて経験しました。そのとき、恐らく戦地では兵士同士が戦うだけでなく、戦争に加担しない子どもやお年寄りも標的にされ犠牲になっているだろう、その歯止めはどうしたらいいのか。それを知るために独立し、世界の紛争地や貧困地域を取材して回るようになりました。

――今ウクライナ危機は1年が過ぎ、終わりが見えません。

本当にどうしたらいいのか、無力感に苛まれます。戦争はまさに理不尽なことがとめどなく連鎖していくので、戦争を始めないことが大きなカギになります。始まってしまうと、破滅的な結果を招くまでは止まれない。

――戦争を起こさないために私たちができることは？

戦争になると人はどう行動し、どんな出来事に巻き込まれてゆくかを知ることが大事だと思います。私は太平洋戦争に出兵されたお年寄りや沖縄戦で戦った兵隊さん、巻き込まれた住民の方に話を聞き、同時に世界各地の紛争を取材しました。人は戦争という環境に置かれると残虐なことでも平気でやれる、非常にもろくて弱い存在なのだと知りました。これは心理実験からも明らかです。環境や肩書、命令系統があれば、ほとんどの人が残虐な行為をする。そうなってからでは遅い。戦争を遠ざける不断の努力をし、それを多くの人と共有して広がりを持たせることが大事だと思っています。

紛争の根本原因

――破綻国家と言われるソマリアを取材されました。

訪れたのは 2003 年、今から 20 年ほど前になります。当時ソマリアは、一時は国連機関や国際NGOが支援活動をしていましたが、私が行ったときには治安が悪化し、外国からは誰も入っていませんでした。私は単身だったのでケニアに置かれた国連事務所に相談し、現地でのコーディネーターを紹介してもらい入りました。空港には滑走路も管制塔もなく、舗装もされていない土のグラウンドに降り立ち、無政府状態ですから当然入管手続きもありません。私のパスポートで入国しながらハンコを押してもらわなかった唯一の国がソマリアです。

荒廃した町に建設中の建物はほとんどなく、破壊されたまま。教会や学校、病院も破壊され、日本なら助かるような病気や負傷でも子どもが治療を受けられず亡くなっていました。人びとはお金もなく、生産するものもない。何をするかというと、金持ちを誘拐して身代金を奪ったり、何十もある武装勢力に入って戦闘や海賊行為で金を稼ぐ。多くの若者がそんな生活をし、命の奪い合いが日常という状態でした。

――子どもたちの様子はどうでしたか。

意外に思われるかもしれませんが、結構明るいという印象でした。現地でわずかにNGOが支援する学校があり、その教室で見た生徒は目を輝かせ一生懸命学ぼうとしていました。死が隣り合わせだからこそ、「生きよう」

町中に無数にいる民兵。各勢力の武装解除と生活支援が必要だ。2003 年、ソマリア　写真：國森康弘

「学ぼう」という意欲を感じさせたのかもしれません。あのときの子どもたちも今では大人になり、どうなったか。ソマリアの平均寿命はものすごく短いので、亡くなっているかもしれない。生きていても、厳しい状況にあることは変わらないだろうと思います。

――アフリカの紛争はなぜ終わらないのですか？

そもそも紛争が起こり、多くの難民が生まれるのは幾つかの国が紛争の種をまいてきたからです。勝手に国境線を引き、資源を収奪し、人権も大切にしてこなかった。そこに富の偏在や格差が生まれ、憎しみの連鎖が起こる。かつて植民地支配をした国の責任は重いと思います。それをすっ飛ばして解決できるかというと非常に難しい。紛争で国にいられなくなった人びとは難民となり、かつて自分たちを支配した国の元へどんどん流れている。それ以外の国にも助けを求めて押し寄せ、受け入れる側は国境を閉ざし、対応に苦慮しています。原因と結果というのは正しくそこにあるわけで、因果応報です。アフリカの紛争は、根本を正さないと永遠に終わらない問題だと思います。

――根本を正すとは？

国境線をどう引き直すのかということ、そもそも国境は要るのかという議論までゆくかもしれない。と同時に紛争の背景にある圧倒的な経済格差や収奪をなくす。それが解決できれば、難民が自分たちの土地に戻る流れを生み出せるんじゃないか、実現するのは難しいですが。

――アフリカの人道危機に日本人は無関心です。

自分たちの生活で精一杯だとは思いますが、結局は回り回って自分に返ってくる問題です。他の人を大事にできない社会というのは、最終的には自分のことも大事にできない、大事にされない社会になります。いま日本には入管施設の問題など多々ありますが、困って日本に助けを求めてくる人たちには、やはり尊厳を大切に保護することが必要だと思います。そういう人たちを排除するとか、見えないよう隔離することではまったく解決になりません。

今後、アフリカの紛争解決で日本にできることがあるとすれば、和平の仲介役であり、第一次産業への技術支援、教育活動ではないでしょうか。

命をつなぐ

――国内での取材が増えました。

戦争とか貧困の取材を通じて見てきたものは、絶望のなかの死でした。戦争や貧困というのは人が生み出している人災です。その人災さえなければ、目の前で亡くなった子どもはもっと生きて大人になり、家族を持ち、孫やひ孫にも出会えたかもしれない。そういう人生を送ることなく、道半ばで亡くなってゆく。自分の寿命を全うすることなく死に追いやられてゆくのは、「冷たい死」だと感じたんです。その「冷たい死」を伝えるだけでいいのか。原因や背景を探り、どうしたら防いでいけるのかを考え、死は悲しいけれども「温かい死」であってほしいと願うようになりました。

「温かい」とは自分が授かった命を全うし、周りには親しい人たちがいて、その人たちに「命の営み」を受け継いでもらえることではないか。私は「命のバトン」と言っていますが、そのバトンリレーを正面からとらえて写真と言葉で伝え、「天寿全うのあり方」というのを共有できればと思ったのです。国内で介護や看取りの現場を主な取材対象としましたが、以前訪れたイラクやソマリア、スーダンなど海外の写真も厳選し、『生老病死そして生』*という本にまとめました。

――さまざまな人生があり、多様性を感じました。

いろんな人たちの命をつなごうとした物語です。たとえ血のつながりはなくとも、一人ひとりの人生を受け止めて引き継ぎ、また次につないでゆくという営みを大事にしていきたいと思っています。この「命のバトンリレー」ということを理解できてこそ、初めて遠い国で起こっている戦争が人ごとでなくなり、「戦争を止めよう、貧困をなくそう」「みんなの命のバトンを守ろう」と願う原動力になるんじゃないかと思います。

＊『写真と言葉で刻む　生老病死そして生　限りがあるから　みんなでつなぐ』2020 年 3 月　農山漁村文化協会